

♪わがまちのオーケストラ♪

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 上席主任研究員

静かな冬こそ音楽に親しむ季節、年末の第九やニューイヤーコンサートなど都市の大小を問わず華やかに行われている。百人近いフルオーケストラのコンサートが創る非日常的な空間に惹かれて、ワクワクしながらホールに足を運ぶ。最近では、地方都市にも立派なホールができ、ファミリーコンサートから本格的なものまで、身近で音楽に接する機会が生まれている。

オーケストラは大規模な編成で行われるため、安定的な経営が難しく、残念ながらプロの楽団は地方都市ではまだ多くない。アマチュアは、アマチュアオーケストラ連盟（本部：豊橋）に加盟する団体が、全国に144あり、中には、セミプロ級の腕前で地元で親しまれ、積極的にコンサート活動をしている楽団もある。

全国に30あるプロオーケストラの分布をみると、東京（10）、大阪（5）、名古屋（3）の三大都市圏や、札幌、仙台、横浜、京都、広島、福岡の政令市など多くが大都市を本拠地としている中、山形、金沢、高崎の地方の楽団の活躍も注目される。

幼い頃から暗唱し、どの世代にも共通する「上毛かるた」で郷土愛を深めている群馬県には、昭和20年創立の“群馬交響楽団”がある。高崎市をホームタウンにする、NHK交響楽団に次ぐ古い歴史を持つプロのオーケストラである。今では、県内で「群響」の名前を知らない人は誰一人いないと言ってもよいほど、親しまれ着実にファンを増やしている。

その理由は、昭和22年の昔から続けられる“移動音楽教室”の存在にある。県内の小・中学校を巡回し、フルオーケストラの演奏を行ってきた。その後、高校も加わり地元の子供たちは、小学校の低学年と

高学年、中学校、高校時代に少なくとも4回、「群響」に接する機会に恵まれる。

楽員たちは、年間約50日100公演というハードスケジュールを、60年以上も続けてきた。両親・祖父母と家族三代が同じ移動音楽教室を体験していることになる。クラシック音楽には、古くから引き継がれた美しい旋律で曲に流行がないので、時を超えて同じ場面が再現されるという魅力がある。

群馬交響楽団の落合副事務局長は「小学生は、間近で生のオーケストラに接し初めて、その迫力や震える音を体感します。音が重なり合い音楽が創られていく過程もぜひ見てほしい」、演奏者たちも「初めてオーケストラを聴く子供たちがいると思うと、こちらも緊張して新鮮な気持ちで演奏することができます」と話してくれた。いつの時代も変わることのない、音楽を通じた人々の心の動きが、ここにも映し出されている。

音楽文化に生まれ成長した大人たちが、群響と共演をしたいと、県内外に10団体の合唱団が創られた。恒例となった年末の第九コンサートは、毎年県内3ヶ所6公演が予定され、多くの知り合いで満席になる。

“まちの楽団”として、自ら住民の中に入り込み交流してきたことで、その価値が広く地域に浸透している。世代が移り行く中にも、同じ響きを共有することで、人々の心に前進する勇気が育まれる。それらは一つとなり、分かち合いながら、明日の地域の活力を生み出すかけがえのない存在になる。

【お知らせ】

当研究所のホームページ：地域未来研究センター「地域データ図書館」の中に、『欧米のまちづくり』が始まりました。第一回は、中心市街地活性化事例集です。

